

敗戦直後、思索を重ねた完造さん

大 里 浩 秋

前号には、1944年6月5日から8月17日まで、完造さんの生活拠点である上海に始まり、青島經由、出張先東北（以下、満洲）の大連、奉天（現瀋陽）、新京（現長春）を回り、さらに帰国して故郷岡山と東京を往復して、各地で触れあった人々との語らいや見聞したことなどを綴っているのを紹介したが、戦況劣勢の影を随所に感じさせる内容になっていた。今号では、日本から汽車で朝鮮經由奉天に着きそのまま北京に向かう8月18日に始まり、同月24日に上海着、それからは敗戦を経て46年10月5日までに上海で経験したり思索したことを綴った多くの雑記の内容を、ほんの一部であるが紹介しつつ感じたことを述べたい。なお、前号のコメントに上海帰着を9月になってからとしたのは、『花甲録』に9月2日とあるのに従ったためだが、それは間違っていたようなので訂正する。

さて、この時北京には8月22日までの4日間滞在して、知人や出版関係者と会い数か所観光地巡りをしているが、日本から中国に戻って気付いたこととして「東京の顔がはっきりと浮かんできた」と、戦況に押しつぶされつつ生きている日本人の様子を印象深い言い方で振り返っている（8月19日）。また、奉天から北京に向かう車中で記したもののだろうか、「車窓」「偶感」に始まる満洲に関する一連の雑記（8月18日）には、前号に紹介したと同様の想いが綴られており、「兎に角満洲は日本の生命線であると云ふたのはもう忘れたか。日本人の脚がドン丈け満洲の土に喰い込んだか……」と記して、日本人の食料を確保できる条件が満洲にはあるのだから、中国人と共存しつつもっと本腰を入れて食料生産に精を出すべきであるのにそれがうまくできないのはどうしてかと齒ざしりしている印象を受ける。

ところで、上海に戻った8月24日までは毎日書いていた雑記が、その後は飛び飛びで書かれることになった。なぜか、恐らくはそれまでのように毎日書き続ける余裕がなくなったのである。米軍機の空爆が上海でも連日の如く展開されて死傷者が出る状況になり（11月11日の記述に詳しい）、そうした状況下大晦日に最愛の妻みきさんが持病を再発して2週間後には亡くなる不幸が重なった。そして敗戦を迎えた。敗戦前後の上海の様子を完造さんの雑記で読めないのは残念だが、致し方ないことであった。

日にちを付した雑記は45年3月までで、その後日付けなしのメモ書きが1、2篇あるものの、飛んで書かれるのが同年10月2日であるから、半年は中断していたことになる。しばらく中断した雑記をなぜまた書き継ぐことにしたかは無論不明である。しかし、敗戦の現実を受けとめられずにいる上海在住の多くの日本人を身近に見て、彼らの混乱を鎮めて無事帰国させる仕事を在住日本人有力者の一人として引き受けると共に、内山書店の閉鎖に当たって中国人店員に応分の手当てを出す準備をし、さらには完造さん自身の身の振り方としてあくまで上海で内山書店を継続させたいと決意するまでに一定の時間を要してから、再び雑記を書く時間を取り戻したということになろうか。（但し、研究会で雑記を半年も中断したことを話題にした際、筆まめな完造さんのことゆえそれほど長く中断せずに書き続けているはずで、その部分の雑記が保存されていないだけではないかと考える人がいた。そこで、そうした推量を否定し切れない筆者としては、その考えをここに記すことにした。）

そして、書くのを再開した時の最初の雑記「最悪の平和も戦争に勝る」には、「誰もが皆な泣言ばか

り言ふて居る。未だ未だ事態の真相が解って居らん様である。吾々は最悪の平和も戦争に勝ると云ふ事がハッキリ解らねば、感謝も懺悔も恐らくは解らんであらうと思ふ」と書いているが、この表現に、冷静に現実を見つめてこれからも中国人と共に平和に生きたいとする完造さんの願いが込められていると、私には感じられた。以下には、その後間を置きながらも多くのテーマを取り上げて書き続けた雑記中、筆者が関心を持つ2点に絞って完造さんが何を語っているかを見ていきたい。

1点目は、上でも少し触れたが、日本敗戦直後の上海で取り組んだこと、内山書店の再開を目指したことについてである。上海では、国民政府配下の第三方面軍が在住日本人の管理に当たり、その指揮で日本人の自治会が組織・運営されたが、完造さんはその中心的な存在として活動したことが雑記には何度か書かれている。例えば、日本引き揚げについて生活困難者を優先させたり、引揚船が難破する事故に遭った際の被害者への物質的な援助に当たったりし、自治会先導課で研究会が開かれた際にはその講師を務めており、個人的にも戦前から行っていた漫談会を復活させたりと、混乱した状況下にいる日本人を落ち着いて行動するよう導いている。

なお、帰国後に書いた『花甲録』には、上海の日本人商店は終戦とともに全部閉鎖されたが内山書店だけは2カ月余り後の10月23日に接收が始まるまでは営業していたとのことで、つまりは特別扱いされていたとも受け取れる状況にあった。そして完造さんとしては、店を接收された後も、それまで培ってきた中国人との交流関係を利用してでも内山書店を何とか再開して上海に留まることを願いつつ、帰国を急ぐ同胞の世話に当たったということになろうか。それゆえに、上海に残って書店を再開したい旨の嘆願書を2度当局に送り（12月1日、29日）、それへの回答を得ないまま、古本を一部仕入れて再開の意思表示もしている（46年10月3日）が、『花甲録』に書くところによれば、47年暮れに突如強制的に引揚船に乗せられ帰国させられたのである。雑記中の記述には『花甲録』に書かれた内容と重なるものもありそうでないものもあり、その二つの内容をつなぐことで、さらには第三方面軍関係が出した『改造日報』等の中国側の記録を参照することで、完造さん自身を含む上海在住の日本人が過ごした敗戦直後の状況がより分かるのではないかと思った。

2点目は、日本が起こした戦争について、さらに戦後の日本人の動きや日本への他国の反応についての雑記である。そのうち戦争については、例えば、「日本は今度の戦争で色々の事を学んだが、其中でも数量の問題については非常に深刻な勉強をしたのである」とし、「日本は何日でも必勝の信念が勝利するのだとか、日本精神が勝利するのだと主張してきた」が、「実は敗因ははっきりと始めから解って居るのである」と書く（「何を学んだか」、46年7月12日）。また、「日本には沢山の大臣大将級の人々が戦犯として投獄されるらしいのであるが、其人々の中には真正面から自分が此戦争を肯定したのはコウした考へからであるとか、自分は戦争に対してコウした哲学に立脚して居る、それ故に此戦争は起こされたのであるとか、兎に角一人のコウした人がない。悉く私は反対であった反対であったと云ふて居る。つまり日本人の代表者達は……全部が奴隷根性の人間であったことを暴露して居る。コンナ人々によってよく戦争をしたものだと思へるが、国民全部が又モ一つ輪をかけた奴隷根性の持ち主と来て居るので丁度よかった、奴隷根性の大臣大将の指導によって奴隷（国民）が戦争したのである」（「考へるべきだ」、46年8月9日）と書く。前号には、政府が戦時中に採った上海での経済統制や満洲進出政策に対する批判が綴られていたが、戦後になってから書いた政府や軍への批判はより痛切なものだったことがわかる。

次は、戦後の日本人の動きや日本への他国の反応について。45年12月17日の「私の疑義」には、GHQによる日本統治について「各国は敗戦日本を帝国主義、軍国主義から解放してやる、そして民主主義国家を造ってやる」と云ふてしきりに指導して呉れる。それは誠にありがたいことである。マッカーサー元帥は日本憲法の改正を命じ……何も彼も民主に変更せられたことは実にありがたい事であるが」と書いた上で、「民主主義が平和主義であるならば、軍人によって民主主義の招来はドンナもので

あろうか。平和は決して軍国主義によっては来ないことであることは」今回の日本の敗戦ではっきりわかったのだとする。アメリカ主導の日本統治がその後現在に至るまで深く影響を及ぼしている実態を考える時、完造さんの「疑義」は重要な指摘を含んでいたととらえることができる。

また、46年8月4日付の雑記に、「吾等日本人は文化を生み出して居らん。それ故に文化の根がない。此れが日本の最も好い点であると共に又好くない点である。如何にアメリカが日本を民主化せんとすれば容易に民主化する国である。又人間も左様になる人間である。……丸で日本人は奴隷であるのだ。然し日本人は自分等の生活こそ奴隷生活であると意識している人は甚だ少いのである」と書くのは、上記「考へるべきだ」とも重なる内容になっており、戦前から中国人社会に暮らして中国人と日本人の文化の違いについて感じてきたことがこのような内容に反映されているとは言えないだろうか。さらに、46年9月14日付の雑記「疑ひを解くには」は、「中国人は日本の現在迄の転向を見て頭から疑ふて居るのである。日本人は必ず表面には民主々義を装ふて、内心では復讐を考へて居るに違ひないと考へて居る。此の疑ひ深かい性質は歴史的に見て其権謀術数の生活が造り出したものである。それが特に日本人に対する時に一入疑ひ深いのは、中国人の此の歴史的性質を見抜かないで何日でも思い付き的な行為を現実にして見せた処に一層拍車をかけたのである」とした上で、「中国人は人間を無視して事件とか仕事とかばかりを見る癖がある」から、彼らの日本への疑いを解くには「声明は余り重要ではない。必要なことは実物を見せる事である」、つまりは、実際の行為によって示す以外はないと言うのである。中国人の日本人への不信を解くには、言葉ではなく実行によって示すしかないとするのは他の人でも思いつくことながら、中国人の性質を熟知する完造さんにして導き出される論の進め方には説得力がある。以上、特に二点目については、私が興味を覚えた雑記を数篇紹介したに過ぎないのであり、それ以外にもこれはと感じた文はいくつもあった。しかし、紙幅の都合でここまでに留める。

さて、読んでいただければすぐにおわかりになることだが、完造さんは、上に私が取り上げた日本関連のテーマの他にも、中国を含む他国に関する文学・思想、政治、経済、キリスト教、医学等々多方面のテーマを取り上げて書いているのである。なぜこれだけ多方面のテーマに言及しているのかと奇異に感じることもなるが、完造さんとしてはその都度今はこのテーマで書こうという動機が何らかあったはずで、それまでに蓄積していたたくさんの素材の引き出しからその動機に合ったテーマを取り出して書いたということになるのではないか。そして、そういう思索を重ねて私たちが目にしている雑記に続く雑記をさらに書き継いでいたはずの頃に帰国を余儀なくされ、上海在住時から思っていたに違いない「日本人に本当の中国人を、中国を知って貰うことを決心し」て、各地で「懸命の力を集中して、中国及び中国人の実情を訴え」たのであり（「自ら省みて恥かしい」1958年記、『アジア経済旬報』793号、1970年6月号）、さらには組織的な日中友好運動に関わることになったのではないだろうか。